最果ての一匹狼

第1回 一匹狼の遠吠え

㈱上原農場
代表取締役・四代目
上原 安浩



1964年生まれ。初代が1915年に北海道中標津町へ入植。現在、ソバを240ha、種イモを10ha、生食用馬鈴薯を10ha生産。農産物保冷庫と蕎麦粉製粉施設を所有し、日本全国に販売。2023年春に「最果て食堂」を知床と博多にオープン予定。
https://ueharafarm1915.co.jp/

例えて言うなら闇に紛れて人の食糧をかすめ取る、ドブネズミのような奴らとはさっさとおさらばして、共に理解し合える者たちとプロフェッショナルな仕事がしたい。ストレスのかかる奴らと頑張る必要はない。

だが世の中、真摯に土と向き合って農産物を作り、独自販売を始めると、気づいたときにはハイエナの群れに囲まれている。姿かたちは知性のある人間でも、野生動物の生態系となんら変わらない。農民が毎日、汗水垂らして働き、疲れ切って寝ている間に、吸血コウモリたちは自分たちに都合の良い生態系を着々と作り上げる。元々素直で単純な性格の私がそのことに感づいたときには、奴らは頂上の見えない巨大なアリ塚を築き上げていた。

それにひるまず、このまま突き進もうと決心するのに時間はかからなかった。邪魔する奴らには立ち向かわなくてはならない。この世界は付き合う相手次第で、ともすれば支配される関係性になってしまう。己の理想を手にするには自ら土台から作り直すしかない。

ここで語る〝最果て〟のストーリーはさかのぼること15年前、たくさん失敗しながら取り組んできた、商売の環境を自分で構築するまでのお話である。神のご加護もたびたびあった気がする。信じられないミラクルが実際に何度もあった。同じ農業者の皆様に、これまでの体験談を少しでも参考にしていただけたら幸いである。

私は、親父から開拓の精神を叩き込まれた。腰が折れるほどの農作業に加え、冬は木こりと、四代目の使命がなんたるかを学んできた。そうした開拓の精神を受け継いだ農民の皆様と心はいつも共にある。情熱が続く限り、次世代のために農業者を取り巻く環境をあるべき姿に近づけるのは我々の命題だろう。

私は集団の心理に興味があり、観察を重ねてきた。集団の中の人間は、トップの判断次第で面白いことに、良くも悪くもなってしまう。それに対して農業者のほとんどの人は、集団を動かす力の前に、自分の本当の考えを封印して従う道を選ぶ。「営農を辞めてください」と告げられたら、あっさり辞めてしまう。一定のラインを越えたら、チャンスがあっても例外は認めないそうだ。自分たちで自分たちの首を絞めるルールを作る。まったくアホな話だ。

中には素晴らしい人間性の農民もいるはずだが、誰も口を開かない。私は、そんな集団の心理に嫌気が差し、農産物全量を独自に自分の責任で販売することにした。そうしないと自分の大義名分が許さなかったからだ。

最初はなかなか良い世界だと思いたかったが、何せ道東の畑作である。私が集団から離れた当時は他の名立たる産地とは別次元で、畑作共済のない無防備のありさまだった。そうした状況下で260haの畑作を展開していたとは我ながらまったく信じられない。

集団のトップの能力が足りないと、何も知らない農民は自分の能力が足りないと思い込み、簡単に離農してしまう。国の手厚い共済制度に見放された地域だとも知らずにだ。

農業者は基本、国の政策の中で生かされ、農産物価格のほぼ半分は国のお金で生きている。自分の実績に基づいて、それで良しと考える農業者はそれで構わないだろう。しかし、私の場合はただの歯車になるのは己の開拓精神に反していた。

まさかこれほど苦労するとは思わずに飛び込んだ独自販売だったが、せめて次世代に引き継ぐころには笑い話にしたい。（つづく）